

いよいよ公開！

石川県七尾美術館開館10周年・新七尾市誕生記念

# 国宝・松林図屏風 長谷川等伯展

4月25日(月)～5月8日(日)

今月25日に一般特別公開を控え、改めて出品作品の紹介をします。今回の等伯展では、何よりも「松林図屏風」の特別公開が話題となる訳ですが、「松林図屏風」までの流れを紹介する意味で、20歳代から40歳代の作品も展示します。

## 能登から京へ

等伯は、20歳代にはすでに仏画や肖像画を中心に描き活躍していました。生家の奥村家、養子先の長谷川家はともに法華宗で、27歳筆の「日蓮聖人像」(一)をはじめ、法華宗関係の作品が多く知られています。一方、「善女龍王図」(一)や「愛宕権現図」(一)といった密教系や、

「達磨図」(一)のような禅宗関係の作品も現存することから、20歳代から30歳代頃の仕事としては、宗派にこだわらずこなしていたことが分かります。等伯は30歳を過ぎて上洛、本法寺の第八世「日堯上人像」(一)を描いています。その緻密な描写からは、若くして亡くなった上人の様子が伝わってくるようです。また、故土居

「松林図屏風」(右隻部分)長谷川等伯筆 東京国立博物館蔵

次義氏は本図の落款を元に「長谷川等伯・信春同人説」を提唱された経緯もあり、資料的にも重要な作品として知られています。

40歳代の動向は確かではありませんが、「陳希夷睡図」(一)には、主に狩野派が使用する鼎形の「信春」印が捺され、その筆致にも狩野派の影響が看取されることから、堺の文化人たちと親交を深めながら、様々な画派の絵を学んだと考えられます。

## 最も充実した時代へ

50歳代に入った等伯は、積極的に活動の場を求めていきます。その過剰なまでの創作意欲を示す、興味深い逸話が残されています。

圓徳院所蔵の「山水図襖」(一)、四面は楽家所蔵)は元大徳寺三玄院の襖絵で、住職・春屋宗園の留守中に等伯が上がり込み、周りの者が止めるのも聞かず一気呵成に描いたというのです。襖は何面もあり、恐らくは草体でサツと描いた後、戻って見た和尚の許しをもらってからの他の真体部分などを描いたと考えられますが、この襖には元々桐家紋が施されており、あえてそこに描くには何か特別の意図があったのではないのでしょうか。

そこで言われているのが、雪景色に見立てて描いたのではないかということです。桐文様がなければ一見バラバラに点在して見える景色も、

雪景色として見ると絶妙な配置となり、余白の部分も生きてくるのです。

この制作の翌年、仙洞御所障壁画の制作を狩野派に阻止されるも、秀吉の長男・鶴松の菩提寺である祥雲寺の障壁画群(現・智積院蔵)を一派で制作、名実ともに狩野派を脅かす存在へと成長していくのです。

しかし、人の世は儂きもの…後継者となるはずの息子久蔵が、26歳という若さでこの世を去るのです。

## 独自の水墨画の確立

深い悲しみの中、等伯は前にも増して水墨画に美の境地を求めていきます。この頃、特に目を引くのは動物をモチーフに描いた水墨画で、描かれた動物たちは、牧谿や他の画家たちの絵とは異なり、楽しげな親子や番の姿でした。

30歳を過ぎて大舞台京都を目指し、ひたすら権力に立ち向かってき



「山水図襖」(部分)長谷川等伯筆 京都市・高台寺圓徳院蔵